

令和俳句論考

百瀬 初江

片思 目交まなかわに陽炎へる人いつよりぞ

高山れおな

寄風恋 君を巻く色なき風として忍ぶ

(第五句集『百題稽古』より)

本句集は、王朝和歌「百首歌」の題詠に挑んだ野心作である。別添の葉によれば、平安後期、当時の有力歌人に詠進させた百題による「堀河百首」を筆頭に、「永久」「六百番」の二百題を加えた三百の歌題を百首ずつ俳句で詠み重ね、まとめたものである。句集名『百題稽古』には、三百首の句を整然と収め、俳句をもつて新古今歌人に迫ろうとした作者の意図が込められている。

一句目、百題稽古Ⅰ「ほりかは」恋十首の句。掲句は「片思」という詠題のもと、陽炎のごとく眼前に浮かぶ人をつからかずつと思いつけている切ない心を詠んでいる。これと類似した表現は万葉集にもあるが、詠題により恋の句として成り立っている。

二句目は百題稽古Ⅲ「六百番」恋五十首の句。「恋しい君を包む秋風となりじつと忍んでいます」という平安貴族の恋文のような句。「色なき風として忍ぶ」の措辞がロマンチックである。

氏は「豈」「翻車魚」同人

墨の抱く白の深さよ春の闇
寒鴉ぬめる尾羽根の藍の色

衛藤 能子

(第二句集『墨孕む』より)

一句目、白い紙に向かうとき、それはただの無垢な平面に思える。しかし、墨を含ませた筆が一度紙を走ると、白い紙に深さが生まれる。墨は濃淡や掠れなど多様な表現ができる。白い紙はそれを受け容れ、深さを増していく。月のない夜、風や匂いに春の息吹を感じる暖かさ。そこには、心地よく墨と紙の匂いを楽しんでる作者がいる。墨に魅せられた作者の想いが感じられる。

二句目、厳寒の中、餌を求めて歩く鴉は寂寥感を誘う。その尾羽根は濡れたように重くしっとりしている。それは寒風に晒されながら冴える色、黒ではなく藍の色なのだ。日本人の黒髪的美しさを称える濡羽色を思い浮かべるが、むしろ、淡墨で透明感のある青墨を感じる。冬の厳しさに生きる寒鴉の藍の色が美しい。

氏は「八千草」同人 追記 令和六年十一月ご逝去されました。合掌
神在やかはたれどきの杵の音
なるかならぬか声を雀にはばかりぬ
大山 文子

(第二句集『なるかならぬか』より)
旧暦十月は神無月である。ただ出雲地方だけは「神在月」である。全国の神々が集まる出雲では、神迎祭、神在祭、神等去出祭という神事が行われる。一句目、神が確かにこの地に在すことを作者は実感している。夜も明けやらぬ刻、神在祭のお供えであろうか、杵を打つ澄んだ音が響いてくる。静かで厳かな句。島根を故郷とする作者だからこそ詠める敬虔な郷土詠である。

二句目、「成木責」は小正月に果樹、主に柿に「なるかならぬか、ならねば切る」と木を責める豊作祈願である。作者はあとがきに「食卓から見える場所に柿の苗木を植えた。この柿の木が遠い故郷を繋ぐ縁」だと述べている。その大切な柿の実りを約束するか

け声を、雀に聞かれないようにそつと唱える作者。故郷の象徴である柿は、何よりも作者を支えてくれるのだ。郷愁の一句。

氏は「火星」副主宰

天空に一瞬の罅寒の鴟

新谷 壯夫

宮城野や雨の匂ひの茅の輪立つ

(第二句集『翠嵐』より)

一句目、真冬の早朝は冷え切った空気が肌を刺す。澄んだ空へ鴟の声は遠くまで響き渡る。特に鳴き始めの声の鋭さは、寒の鴟の特徴である。その空を劈くような鳴き声を耳にしたとき、一瞬高い空に罅が入ったかのように作者は感じたのだ。寒の鴟の声を捉えた作者の鋭敏な感性と巧みな比喩が光る句である。

二句目は「奥の細道を訪ねて」と題された章の句である。芭蕉が宮城野（現仙台市）に入ったのは陰暦五月四日（陽暦六月二十日）である。芭蕉は、逗留中に薬師堂、天神の御社を参拝している。芭蕉の足取をたどり、同じ季節に宮城野を訪れた作者。折しも雨上がりの天神様に立っていた茅の輪。近づくにつれ感じた雨の匂い。そのしめやかな感覚が芭蕉と同じ地に立った感慨を深くしたのだ。五感を通して芭蕉を身近に感じたのではないだろうか。氏は「鴉の子」同人

冬ざれの母校一周して帰る

坂本 登

それぞれに湯を入れて待つ夜食かな

(第一句集『松の位置』より)

一句目、木々は枯れ、もの寂しい冬の母校。作者は帰りがけにその前を通り敷地を一周する。子どもたちの姿はすでない。歩きながら、自分の子どもの頃を思い出す。変わらずにあるもの、

新しく増えたもの、すでに無くなっているもの、そこには歴史がある。これまでの人生が脳裏を過る。抒情あふれる哀愁の句。

二句目、仲間内数人で吟行に出かけた。句会は盛り上がり、俳句談義は夜が更けるまで続いた。そんな日の夜食はカップ麺だ。

湯を入れて待つ間の僅かな時間が、仲間との絆を深め、充足感と安堵感に包まれていく。ふとそんな光景が目につかぶ句である。作者の細やかな目は、日々の小さな心の動きを掬い上げる。市井の暮しを捉える感性は柔軟である。

氏は「OPUS」同人、編集人「青山」同人

瑠璃色の潮の満ちくる光琳忌

沼田 布美

ありのまま生きて吊し雛飾る

(第一句集『瑠璃色の潮』より)

一句目、瑠璃色は紫みを帯びた濃い青色のことである。見ていると吸い込まれてしまいそうな美しい海の色。満潮の刻、ゆつたりと動いている潮を鳥瞰しているのであらうか。季語の光琳忌は、光琳の金箔を多用した煌びやかな作品を彷彿させ、満潮の海を照らす夕日の煌めきを思わせる。色彩の美しさが際立つ句である。

二句目、ありのまま生きることとは、実は容易いことではない。

それでも作者は、信念をもち自分なりの生き方を貫いてきたのだろう。一つ一つの人形に子の幸せを祈る吊し雛を飾りながら、子どもたちにも自分らしく生きて欲しいと願う。そんな想いを表現したように感じた。掲句は破調、字足らずであるが、一文字の空白が大きな余韻となって響いてきた句である。

氏は「稲」同人、「玉藻」会員

(筆者住所 〒300-0815 土浦市中高津二一六五)